
零崎殺識の人間関係

佳織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎殺識の人間関係

【Nコード】

N2687X

【作者名】

佳織

【あらすじ】

僕の名は零崎殺識。表での名前は秋冬皐一しゅんとう さつき一。僕の妹は零崎楽織。表での名前は春夏希良々一ひとせ きらら一。僕達殺人鬼が迎えるのは、所詮終わりの無い終わりだった。

さつきらシリーズ（前書き）

あっはー、ヘタリアと戯言をどう繋げるかが問題だ。

さつきらシリーズ

0章 人物紹介

主人公…零崎殺識ぜろきころしき

本名…春夏秋冬殺鬼ひつとせいつき

表世界での名…秋冬皐しゅうふとうき

二つ名…昏迷僭主 一カレイドスコープデイスペアー

人形煉獄 一ナパームフェイク

年齢…18

武器…斧 絞殺幻想 一ミラージュスファイア

人識と同じく、

生まれついで血統書付きの殺人気。

殺鬼と付けられたのはその所為。

案外この名も気に入っているらしい。

一日の平均殺人数、10。

上の数は自分から襲った場合。

襲われた場合には限界が無い。

得意な事は人殺しだけではなく、

たまに喜楽の遊びや訓練に付き合う。

ちなみに喜楽は殺喜に全てにおいて勝てた事が無い。

戲言遣いとは友人通り越して大親友。

ただあの軋識が従っていたという友が恐ろしく怖いらしい。

変なツボを持ち、抱きしめると狂ったように笑い出す。

ヒロイン

主人公…零崎楽織ぜろぎらくおり

本名…春夏秋冬喜楽ひととせきら

表世界での名…春夏希良々（しゅんかきらら）

二つ名…墮落幻影ーカレイドスコープアイズー

二重解体ーダブルブレイカーー

年齢…15

武器…チェンソー 微小童話ープラズマビリーバーー

（銃 傀儡公主 ースパイラルイミテーションー）

超美少女で気が強く人を守る優しい子。

それ故に人殺しは好まないが、

零崎は人の段階を超して愛している為、

零崎を傷付ける者は容赦なくチェンソーを振るう。

一番体力が無く、腹筋回数30秒最大16回、握力15。

筋力も余り無い為、チェンソーは軽い物を選んでいる。

時折銃に変わる。

軌識にビリーとかカレーとかブルブとか呼ばれる事だけが悩み。

ルイカラルと呼んでもらっているが、喧嘩した場合ビリーになる。

零崎を侮辱されたり過去の話を持ち出されると発狂する。

発狂すると恐ろしく体力が向上。あの哀川潤でさえ苦戦した。

さつきらシリーズ(後書き)

（ ・ ・ ・ ） ショボーン

1章 終わってから始まり始まりで終わる。(前書き)

つまりは最初で最後っつー事だ。ジンセーは。

1章 終わりから始まり始まりで終わる。

春夏秋冬、殺鬼は普通に人生を送っている。

だがその名前が故に学生時代は意味も無く侮蔑され、

妹の喜楽も意味も無く侮蔑されていた。

いや、喜楽に関しては男子からは侮蔑、女子からは嫉妬を受けていた。

それは劣る物無いほどの美形だったからだ。

（殺鬼も美形だが名前の所為で乙女心より恐怖心が芽生えたらしい。）

現在殺鬼は大学生を中退した。

1週間の大学ライフだった。

「もーっ!! にーちゃん何で中退しちゃうのっ!？」

せっかくのいーサンがいる学校でそー!？」

喜楽は机に突っ伏した状態で顔をだし、手足をばたばたして嘆いた。

「その、「兄さん」みたいにいーを呼ぶのはやめろ。喜楽」

「ほえ？ 零崎以外の人に兄ちゃん的なコト呼んじゃ駄目なのっ？

ッはアっ！！！！！

嫉妬すか！！嫉妬ですね！？お兄様！！！！

分かりますたー！！了解でっさー！」

「落ち着け。そういう意味じゃない。発音の問題ってのが〔r y〕

「そーいうことーん！！了承リヨウシヨー！

はっおーん！！出発おーん！！

なははー！」

さらに激しく手足をばたつかせる。

「エンジン停止。」

殺鬼は常備しているハリセン（喜楽用）で喜楽を叩いた。

もちろん手加減はしている。

ヒュンッ！！だなんて音はせず、

ぱすん。と喜楽の頭にハリセンが乗った。

「ほえ（ぱすん）・・・あ、えっと、

あっ、痛ッ!!」

喜楽はそれほど痛くないハリセンを頭で受けた。

「反応遅いよ。」

それからテンション下げて。」

「了解!!」

【きらのテンションがもとにもどった!】

よし。で、兄ちゃんまた大学入る気い無いの?」

喜楽は首を傾げる。

「多分戻るよ。まだ理数系はしたいし。」

殺鬼は喜楽の机にあった椅子に座り、頬杖をつく。

「ふうん、なら良かった。」

いーさんは兄ちゃんが居た時すごい楽しそうだよ。」

ほわわんとした雰囲気で喜楽は笑う。

「・・・だといいけどね。」

その時。

ぴんぽーん

「えーと、喜楽ちゃん？」

戯言遣いが戸を開ける。

喜楽は飛ぶように席を立つ。

バターン！と椅子がぶっ飛んだ。

「k t k r ! ! ! !

ほら来たっ！！噂アすればかもよっ」

「あ、やっぱり喜楽ちゃんだったんだ」

「ほえ、何が」

「さっきからくしゃみが止まらなくてね、

喜楽ちゃんの仕業か」

「あっはー！！！！」

ふっ、あっは、聞いた！？

くしゃみの発信源で此処まで来たんだよ!?

テレビで放送すべきだ!!

きつとこれは電話の次に有効な(r y

ともかく上がって上がって!!

もー私のてんそんはとつくの間に上がってるよっ!

→A☆G☆E☆A☆G☆E→だよ!!」

「悪い。こんな妹で」

「あ、いや。

気にしないでくれ、いつもの事だろ」

「そうだな」

「セツナイOrz」

「閑話休題」

「・・・っていう話を先程してたんだ。」

「うん、絶対相性良いよね、二人!」

「「嘘だ」」

「ホントだよー！嘘じゃないよー！

だって兄ちゃんといーさんすごい口調似てるし、

趣味だって合うし、

それから、えーと・・・。」

喜楽は言葉につまり人差し指を口の下に当て瞳を上へずらした。
考えるポーズだ。

「えーと・・・」

今度は「考える人」のポーズをとりだす喜楽。

「もういいよ、喜楽ちゃん。」

喜楽の頭にいーちゃんは手を置く。

撫でているのではない。此処重要。

「・・・むう。」

ホントに似てるんだけどなあ・・・。」

「ていうか、喜楽ちゃんが高校に通ってるっていう噂聞いて此処きたんだけど。」

「あり、くしゃみじゃないの？」

「？さあ、忘れた。」

「うわ、忘れっぽいね。」

まあどーでもいいーや。

うん、通ってるよ。

来良学園。中々いい高校だよ」

「いや、でも喜楽ちゃん殺人鬼でしょ、

ろくに変装もしないし警察来たら一発で終わるよ」

「そんなときは学校ごと破壊するからだいじょぶいV」

「そういう問題？」

「あ、そうか、周りにパトカー集まってるかあ、

だったら地域ごと壊しちゃう」

「それは無理ってもんだよ!!」

「なははー、やってみなきゃわかんないぜ？」

つーより私ガッコに3年くらいいたら警察の人も気付くだろうけど、

今私は高3設定だから大丈夫い！」

そう言って。

春夏秋冬喜樂は笑った。

2章 1ヶ月前（前書き）

らいらがくえん。

2章 1ヶ月前

それは1ヶ月前に遡る。

「・・・喜楽？」

「・・・えへへ」

「今なにをしているのかな？」

「べ、べんきょー」

「喜楽、お前ちょっと勉強しすぎじゃないか？」

「・・・何ゆえ？」

「これ、考え方が高3だぞ」

「・・・んー」

「ともかく・・・、お前今中3なんだから、
中3の勉強をしろ。」

「？」

中3が高3の勉強しちや駄目なの？」

「駄目ってワケじゃねーよ。ただ・・・。」

「ただ？」

「・・・」

まあいいか、喜楽。

お前は高校に入れ。」

「・・・はい？話が分からぬ。」

おや？きらのようすが・・・。

「来良学園　だよ。知ってるか？」

「・・・殺鬼兄ちゃん、

こないだ私を澄百合学園に入学させようとしたでしょ、
今でも覚えてるよ。忘れたなんて言わせないよ。

それに殺人鬼から殺人を教わってる春夏秋冬喜楽だ。

・
・
・
・
・
・

どうせ普通じゃない学校なんですよ。」

「・・・普通だよ。

勉強目的で行くんだ。」

「・・・ふー・・・ん？」

まだ怪しげな顔になって、

そして5秒後、何も無かったかのようにけろっと喜楽は言った。

「まあ怪しい学校だったら私その学校ごと壊滅させるからだいじよぶ」

「お前人殺しは好まないキャラじゃねーかよ」

「・・・おや、人識お兄ちゃんではござらんか」

「かははっ、何だよござらんかって」

「ふほうしんにゅーいくない・・・」

「って、人識兄ちゃんは家賊だったや。」

「おう、楽織、殺識。」

「・・・人識さん、今日は」

「同じ同じ歳だろ、さん付けすんな」

「あ、すいません。」

人識、今日は」

「ほんとに言いやがった」

「？」

「さっきまで私達高校の話してたんだよー、

私が高校に行くとか云々。」

「へー、」

「嫌だけどね」

「え」

「・・・兄さん？
零崎殺識兄さん？」

何でそんな動揺してんのかなあ？？

んー？言ってみてー？

何かなー？」

「あ・・・、いや、

制服、もう注文して届いてるんだよね。

入学届けも出したし」

「・・・。」

行くことになりました。

2章 1ヶ月前（後書き）

4章（前書き）

注意です。よく読んでください。

阿良々木ハーレムの皆様は新潟に住んでるはずですが、

池袋に住んでる設定です。

覚えとけよ！（ジャイアン）

4章

「始めまして！」

春夏希良々です！よろしくお願いしまーっす！

ええと、京都から越して来たので全然池袋の知識ないでーっす！

ハブにしたらおこっぞー！なははーっ！」

「ヒューヒュー！！！！！」

「紀、紀田君！」

「なははっ、この学校たのしそーだなー！！！」

「えー、では、次、秋冬。」

「・・・秋冬皐です、よろしくお願いします。」

あ、ども、喜樂です。

私の名前の由来をお教えしましょう。

えー、皆さん、「ひととせ」って漢字で打ってみてください。

「一年」って出ませんか？

はい、私の名前は喜怒哀楽からとってます。

良い意味をとってます。

あれっすね、私は極めて良い名前なんすよ。

一年間ずっと笑ったり楽しんだりするっていうそんな意味です。

さて、兄ちゃん。

兄ちゃんは別です。悪い意味なんです。

一年殺鬼。

一年間ずっと殺人鬼ってわけです。

まあこんな感じで私達の名前が出来てるわけです。

厨2とか言ったら画面から私が飛び出てきますよ。多分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2687x/>

零崎殺識の人間関係

2011年11月11日20時47分発行